

# 歌メロディのスタート・ポイントと長期記憶(4)

—— BS20世紀日本のうたベスト10曲に見る傾向 ——

藤 井 正 博

キーワード：メロディ、長期記憶、日本の歌

## <前号までの章構成>

- I. 分析視角－歌メロディのスタート・ポイントの3パターン分類－
- II. 分析対象曲－BS20世紀日本のうたベスト10曲－
- III. 考察(1)－遅出パターンと長期記憶－
- IV. 考察(2)－早出パターンと長期記憶－
- V. 考察(3)－Just パターンと長期記憶－
- VI. 考察(4)－強拍と長期記憶－
- VII. 考察(5)－音高進行パターンと長期記憶－

(拙稿「歌メロディのスタート・ポイントと長期記憶(1)(2)(3)－BS20世紀日本のうたベスト10曲に見る傾向－」『神戸山手短期大学紀要』47・48・49号、2004・2005・2006年。)

## <予定章構成の変更>

前号末尾で予定していたⅧ章以降の章構成を本号のように変更する。省略した章等については結び等で簡単に触れることにする。

## Ⅷ. 考察(6)－BS ベスト100曲のメロディ・パターンと長期記憶－

前章まで BS ベスト10対象 8 曲の出だし数音符のメロディ・パターンの分析を中心に考察を進めてきた。その結果通常の出現率との比較から長く多くの人の記憶に残りやすい歌メロディは、強と密および上昇ベクトルというパターンの特徴を持つことが明らかとなった。これら強・密・上という 3 つのパターンは特に、第Ⅵ・第Ⅶ章で見たように歌メロディの長期記憶の呼び出し・3 曲選曲時において投票者達の脳にある程度のプラス作用・効果をもたらし、これらのパターンを持つ歌を圧倒的多数 BS ベスト10にランク・インさせた。本章では考察対象をベスト100曲まで拡大し、その他の弱・疎・同・下というパターンと比較しながら強・密・上のこ

うしたプラス作用・効果がベスト100曲においてもなお確認できるのか、またさらに細かく分類されたパターンの中でどのメロディ・パターンが長く多くの人の記憶に残りやすいのかといった問題に焦点を当てつつ以下考察を進めてゆく。

本小論で対象としている BS20世紀日本のうた投票はすでに見たように投票総数1775万票余り、記入された総曲数は2万曲におよぶ。これまで考察してきたベスト10曲は2万曲の中の10曲であり、その価値は疑いようもないが、ベスト100曲の場合はどうであろうか？2万曲中の100曲と考えればなおその価値は高いように感じられるか、中には投票の時期や方法および状況等が変わればランク・インはなかったであろうと推測される曲もある程度多くあると思われる。特に昭和50年代以降の投票年（1997年）にまだ近い曲はその傾向がより強いようである。が、こうした問題を含んでいるとはいえ、最低数万票は得ている BS ベスト100曲はマスとして考えればなお考察対象として一定の価値を有していると考えていいだろう。以下具体的な作業に入る。

ベスト100曲中の考察対象曲は1992年（投票5年前）以前に作曲・発売された83曲である。それぞれの歌メロディの出だし数音符を強・弱、密・疎、上・同・下によってパターン进行分类し、強パターンの場合はさらに早・Jと細かく分類する。それぞれのパターンについて再度規定をしておく。

強 ・ 弱—強はその中に複縦線上の強拍を含むメロディ・パターン。具体的には早出パターンと Just パターンのいずれかである。

弱は強拍を含まないメロディ・パターン。すなわち遅出パターンを示す。

密 ・ 疎—密は1拍以内の早出パターンおよび第1音符が短音符（1拍以内）の Just パターンと遅出パターンを示す。疎はそれぞれ1拍より長い場合のパターンを示す。

上・同・下—本来は第七章のようにベクトルを示すパターンであるが、あまりに複雑になりすぎるのでここではたんに第1—第2音符関係の上昇・同音・下降進行を示すだけに限定する。

早 ・ J—早は早出パターン、Jは Just パターンの略。

時期区分は便宜的に5つの時期に分けた。少しばかり意味付けして言うとな下のようになる。

第 1 期—1901年から1929年まで。20世紀最初の3分の1の時期である。元号的に言えば明治後期・大正・昭和初期である。ジャンルのには唱歌・童謡・叙情歌・歌曲が中心。基本的に歌は楽譜として発表された。

第 2 期—1930年から1964年まで。戦前・戦中・戦後の昭和期と重なる。最終年が東京オリンピックの年である。自由な音楽活動・表現が制限された戦時期を除外して考えると20世紀中葉の3分の1期と考えていい。レコード、ラジオ等のメディアが普

及し、老若男女を問わず誰もが知っている流行歌・歌謡曲の大ヒット曲が生まれるようになった時代である。一方では日本調・民謡調・演歌調の歌、もう一方では外来のマーチ、ジャズ、ブルース、ブギウギ、タンゴ、ラテンといった音楽・リズムをベースとした歌謡曲が日本中に流れ、その両方を日本人が好んでいた時代であった。

第 3 期—1965年から1974年まで。昭和40年代である。高度経済成長の時代であり、テレビで歌を視聴するようになった。投票当時40代の票が集中したと考えられる時期である。

第 4 期—1975年から1984年まで。昭和50年代である。投票当時30代・40代の票が集中したと考えられ、10年間区分では最も多数の曲をベスト100にランク・インさせた時期である。

第 5 期—1985年から1992年まで。昭和末期から平成初期にかけてである。BS 投票 5 年前ということで1992年で区切っている。「川の流れるように」を除いて投票当時20代の票に支えられていると考えられる。

(3－5期)—1965年から1992年まで。第3期から第5期までを小計したもの。28年間だが、第1期、第2期に対応する20世紀最後の3分の1期となる。外来のポップス、ロック、フォーク、R&B といった音楽・リズム・ビート等をベースにしたポップス系の曲が若者の支持を集め、次第に主流になっていく時代である。ポップス系になじめない中高年達はその対極としての演歌を支持し、二極分化が明確になった時代でもあり、もはやヒット中の日本の歌について親子の会話が成り立たなくなった時代でもある。

以下、上記の時期区分にそって BS ベスト100ランク・イン83曲を分けし、曲名とそのパターンを記していく。曲順は順不同。曲名後のカッコ番号はすでに考察したベスト10曲の順位を示している。

第1期 1901—29年（7曲）

荒城の月（7）	強・密・同・J
赤とんぼ（9）	強・密・上・J
七つの子	強・密・下・J
故郷	強・密・同・J
仰げば尊し	強・密・同・早
早春賦	強・密・上・早
月の砂漠	強・密・上・早

第2期 1930—64年（16曲）

高校三年生（4）	強・密・上・J
影を慕いて	強・疎・同・J
人生の並木路	強・密・上・J
かえり船	弱・密・上
長崎の鐘	弱・密・上
青い山脈	強・密・上・J
リンゴ追分	強・密・同・早
岸壁の母	強・疎・上・J
別れの一本杉	弱・密・上
アカシヤの雨が止む時	弱・密・同
赤いハンカチ	強・疎・上・J
ここに幸あり	強・疎・上・J
いつでも夢を	弱・密・同
学生時代	強・疎・上・早
リンゴの唄	強・密・下・J
上を向いて歩こう	弱・密・同

第3期 1965—74年（14曲）

神田川（3）	強・密・上・早
瀬戸の花嫁	強・密・上・早
君といつまでも	強・密・上・早
星影のワルツ	強・密・同・J
悲しい酒	強・疎・同・J
夜霧よ今夜もありがとう	弱・密・上
ブルーライト・ヨコハマ	弱・密・同
よこはまたそがれ	強・密・上・J
心模様	弱・密・上
襟裳岬	強・密・上・早
岬めぐり	強・密・下・早
精霊流し	強・密・下・J
知床旅情	強・密・上・早
おふくろさん	弱・密・同

第4期 1975－1984年（34曲）

いい日旅立ち（2）	強・密・上・早
秋桜（8）	強・密・上・J
いとしのエリー（6）	強・密・上・早
四季の歌	強・密・同・J
なごり雪	強・密・上・早
宇宙戦艦ヤマト	強・密・同・早
酒と泪と男と女	弱・密・同
千曲川	強・密・上・早
シクラメンのかほり	弱・密・上
およげ！たいやきくん	強・密・同・J
時代	強・密・上・早
青春時代	弱・密・同
津軽海峡冬景色	強・密・同・J
北国の春	弱・密・同
UFO	強・密・同・J
チャンピオン	強・疎・上・早
異邦人	強・疎・上・早
ふたり酒	強・疎・上・J
恋人よ	弱・密・上
昂	強・密・上・早
ルビーの指輪	強・疎・下・早
氷雨	強・密・同・J
さざんかの宿	弱・疎・上
待つわ	強・密・同・J
赤いスイートピー	強・密・同・J
花	弱・密・同
ワインレッドの心	強・疎・下・J
兄弟船	弱・密・同
I LOVE YOU	強・密・上・早
娘よ	強・疎・上・J
夫婦坂	弱・密・上
贈る言葉	強・密・上・早
いちご白書をもう一度	強・密・上・早
長良川艶歌	弱・疎・上

第5期 1985－92年（12曲）

川の流れるように（1）	強・密・上・早
時の流れに身をまかせ	強・密・同・J
雪国	強・密・上・早
浪漫飛行	強・疎・上・早
とんぼ	強・疎・同・早
天城越え	強・密・同・J
人生いろいろ	弱・密・上
愛は勝つ	強・疎・下・J
少年時代	強・密・同・J
どんな時も	強・密・上・早
Say Yes!	強・疎・同・早
世界中の誰よりきっと	弱・密・上

以上の83曲のデータをもとに早・Jを除く3文字パターンによって時期別に該当曲数を記したものが＜表1＞である。

<表 1>

A	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	1 - 5 期計	( 3 - 5 期計)
強・密・上	3	3	6	10	3	25	19
強・密・同	3	1	1	8	3	16	12
強・密・下	1	1	2	0	0	4	2
計	7	5	9	18	6	45	33
B	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	1 - 5 期計	( 3 - 5 期計)
強・疎・上	0	4	0	4	1	9	5
強・疎・同	0	1	1	0	2	4	3
強・疎・下	0	0	0	2	1	3	3
計	0	5	1	6	4	16	11
C	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	1 - 5 期計	( 3 - 5 期計)
弱・密・上	0	3	2	3	2	10	7
弱・密・同	0	3	2	5	0	10	7
弱・密・下	0	0	0	0	0	0	0
計	0	6	4	8	2	20	14
D	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	1 - 5 期計	( 3 - 5 期計)
弱・疎・上	0	0	0	2	0	2	2
弱・疎・同	0	0	0	0	0	0	0
弱・疎・下	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	2	0	2	2

<表 2>

	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	1 - 5 期計	( 3 - 5 期計)
第 1 - 第 2 音符上昇	3	10	8	19	6	46	33
第 1 - 第 2 音符同音	3	5	4	13	5	30	22
第 1 - 第 2 音符下降	1	1	2	2	1	7	5
計	7	16	14	34	12	83	60

通常の出現率との比較は考えずに<表 1>の数的結果のみを見ると以下のようなことが解る。

- (1) Aの強・密グループとDの弱・疎グループのベスト100ランク・イン曲数には圧倒的な差がある。45曲対2曲である。
- (2) Bの強・疎グループ(16曲)とCの弱・密グループ(20曲)は、両者に若干の差はあるが、AとDのおおむね中間に位置していると考えていい。

単純に考えれば強と密はランク・イン曲数を押し上げるプラス因子、弱と疎は押し下げるマイナス因子のように見える。強・密は+と+、強・疎と弱・密は+と-、弱・疎は-と-といっ

た具合である。ここではとりあえずA、B、C、Dのランク・イン曲数の差をこのように理解しておこう。

次にもうひとつの重要なファクターである上・同・下について見る。＜表1＞から上・同・下を抜き出し、まとめたものが＜表2＞である。＜表2＞から以下のように言える。

- (1) ランク・イン曲数はすべての時期を通じて上 $\geq$ 同 $>$ 下である。
- (2) 同を基準(0)として考えると上はプラス因子、下はマイナス因子と考える。

この点を踏まえてもう一度＜表1＞に戻る。ベスト100にランク・インしなかったパターンが3つある。それらを+、-、0で記すと次のようになる。弱・疎・下は-・-・-、弱・疎・同は-・-・0、弱・密・下は-・+・-とマイナス因子が多い。ちなみに最もランク・イン数が多い強・密・上は+・+・+である。

こう見てくるとこの+・-因子論はかなり有効性を持っているように思われるが、そう単純ではない。そもそも弱・疎・下、弱・疎・同といったパターンを持つ歌メロディは出現しているのか？出現していなければベスト100曲にランク・インするはずもない。少なくともよく知られている歌あるいはヒット曲の中に筆者自身思い浮かばない。ここで次のことに気づく。筆者は弱・疎・下をたんにランク・イン曲数を押し下げるマイナス因子とのみ規定していたが、もっと深く歌メロディの価値の領域にも応用できるのではないかと思える。例えば、弱・疎・下というパターンは何故にほとんど出現していないのか？推測して言えば作曲者がこのパターンで歌メロディを作っても良いメロディと感じずボツになる。あるいは何とか世に出てモリスナーが良いと感じずヒットしない。こうして当然票が入らずランク・イン数0となるのである。出だし数音符のパターンのみで歌メロディ1曲の価値を決めてしまうのはあまりに無謀すぎるのかもしれないが、ここでいうマイナス因子がどこかで価値そのものと結びついていると意識しておくこともまた必要である。

では、弱・密・下パターンのランク・イン数0の場合はどう考えればいいのか？このパターンには中高年の多くがよく知っている大ヒット曲がある。「北の宿から」である。当時はまだ価値のあったレコード大賞を受賞したこの曲はなぜベスト100に入らなかったのか？考えるのは弱と下という2つのマイナス因子の結びつきによるマイナスの相乗効果である。以下、弱と下のマイナス効果について考察を深めたい。

先ず弱パターンについてである。すでに第Ⅵ章までの考察で弱＝遅出パターンはベスト10レベルでは大きなマイナス効果を持つことは明らかであるが、ベスト100レベルでは83曲中22曲と一定の地歩を占めている。弱＝遅出パターンの通常の出現率はおおよそ3割程度と考えられ、その比較でいうとベスト100レベルでもランク・イン率にややマイナス効果も認めうるが、ベスト10レベルのそれと比べると問題にするほど大きくもない。

問題はむしろ下パターンにありそうである。第Ⅶ章で詳しく考察したようにベスト10レベルではランク・イン0であり、ベスト100レベルでも＜表2＞に見るように7曲しかランク・イ

ンしていない。無論通常の出現率が11分の2程度と低いので少ないのは当然であろうが、その比率よりも半減している点を考えれば下パターンのマイナス効果はベスト100レベルでもなお大きなものがあると考えていい。

とりわけ弱・下パターンの場合はマイナス効果が大きくなる。ベスト100中の下パターンのランク・イン曲は7曲すべて強・下パターンである。曲数は少ないものの強・下パターンの場合は下の大きなマイナス効果を強のプラス効果がある程度相殺していると考えうる。弱・下パターンの場合は下のマイナス効果を弱がさらに助長し、相乗的にマイナス効果が大きくなり、こうして大ヒット曲「北の宿から」もベスト100にランク・インできなかったと考えられるのである。

2つのマイナス因子を持った残りのパターンはどうか？強・疎・下（3曲）、弱・疎・上（2曲）とランク・インしているものの合計5曲でランク・イン率はわずか6%ほどである。マイナス因子を2つ以上持つ歌メロディがベスト100曲に選ばれる可能性はきわめて低いと言わざるをえない。

マイナス因子1つの場合はどうか？

強・密・下（+・+・-）4曲

強・疎・上（+・-・+）9曲

強・疎・同（+・-・0）4曲

弱・密・上（-・+・+）10曲

弱・密・同（-・+・0）10曲

以上のいずれのパターンもランク・イン曲数で2つのマイナス因子の曲数を上回ってはいるが、+と-の単純比例ではない。強・疎・上と弱・密・上の場合には上のプラス効果による押し上げ、一方強・密・下の場合には下の大きなマイナス効果による押し下げの結果と考えられる。残りの2パターンについてはどうか？密・疎と同の関係を深く知る必要がある。

すでに記したように密・疎は2種類の形で規定されている。早出パターンの場合には第1音符から複縦線上の強拍までの拍距離、Just・遅出パターンの場合には第1-第2音符間の拍距離の短・長を密（1拍以内）・疎（1拍より長い）と言い換えているのである。従って早・J・遅の別なく同一に論じるのは無理があるのかもしれないが、とりあえず考えてみる。＜表1＞のAC密およびBD疎と上・同・下との関係を見ると次のことが読みとれる。密・同パターンの場合、同は下よりも上に近く、疎・同パターンの場合は上よりも下に近い。同音進行は、密ではプラスの効果を、疎ではマイナスの効果を持つと考えていいのではないか。こう考えると残りの2パターンの説明が可能になる。強・疎・同（+・-・0）の場合は同がマイナスに、反対に弱・密・同（-・+・0）の場合は同がプラスに作用し、両者のランク・イン曲数の差が生じたのである。

最後に残るのはマイナス因子を持たない2パターンである。強・密・上（+・+・+）（25

曲)と強・密・同(+・+・0)(16曲)である。3文字パターンとしてはベスト100ランク・イン曲数の1位と2位である。両者合計でほぼ5割のランク・イン率である。両者の曲数差は上のプラス因子の差と言えようか。強・密・上パターンの通常の出現率はおよそ2割強とそもそも3文字パターン中では最も多いのであるが、ベスト100ランク・イン率はほぼ3割で意味に通常の出現率を上回っている。すでに考察したこのパターンのベスト10レベルのランク・イン率8分の7と比べると格段に落ちるが、ベスト100レベルでもこの強・密・上パターンが歌メロディの長期記憶の呼び出し・3曲選曲時におけるプラス作用・効果をある程度持っていることを確認できよう。もうひとつの強・密・同パターンの場合はベスト100ランク・イン率は通常の出現率をやや上回る程度で誤差の範囲内とともれ、この点でそれほどの有意味さは認められない。が、無論、ベスト100ランク・イン数第2位のこの強・密・同パターンが長くある程度多くの人の記憶に残る重要なパターンであることは言うまでもない。

単純な確率論で言えば、強・密・上パターンの歌メロディを作ればベスト100曲に最もランク・インしやすいということになるが、そう単純ではない。早出パターンで作るか、Justパターンで作るか、どちらがよいのかという問題が残っている。早・Jを加えた4文字パターンの分析が必要となる。

この問題を考察するために作成したのが<表3>と<表4>である。<表3>は<表1>のA・Bの強グループを早出とJustパターンとに細分したもの。また<表4>は弱=遅出パターンを加え、早出・Just・遅出3パターンのベスト100ランク・イン数を見やすくまとめたものである。

<表 3>

A・早	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	1－5 期計	(3－5 期計)
早・強・密・上	2	0	5	9	3	19	17
早・強・密・同	1	1	0	1	0	3	1
早・強・密・下	0	0	1	0	0	1	1
計	3	1	6	10	3	23	19
A・J	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	1－5 期計	(3－5 期計)
J・強・密・上	1	3	1	1	0	6	2
J・強・密・同	2	0	1	7	3	13	11
J・強・密・下	1	1	1	0	0	3	1
計	4	4	3	8	3	22	14
B・早	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	1－5 期計	(3－5 期計)
早・強・疎・上	0	1	0	2	1	4	3
早・強・疎・同	0	0	0	0	2	2	2
早・強・疎・下	0	0	0	1	0	1	1
計	0	1	0	3	3	7	6
B・J	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	1－5 期計	(3－5 期計)
J・強・疎・上	0	3	0	2	0	5	2
J・強・疎・同	0	1	1	0	0	2	1
J・強・疎・下	0	0	0	1	1	2	2
計	0	4	1	3	1	9	5

<表 4>

	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	1－5 期計	(3－5 期計)
早出パターン	3	2	6	13	6	30	25
Just パターン	4	8	4	11	4	31	19
遅出パターン	0	6	4	10	2	22	16
計	7	16	14	34	12	83	60

<表 3>を見て先ず気付くのは、早・強・密・上（19曲）と J・強・密・同（13曲）パターンのランク・イン曲数の圧倒的多さである。先に考察した<表 1>のランク・イン数第 1 位の強・密・上パターンを占めていたのは実は早出パターンであり、第 2 位の強・密・同パターンを占めていたのは実は Just パターンだったのである。ここでただちにこれら 2 つの 4 文字パターンの分析に入れればいいのだが、難しい問題がある。それは通常の出現率の問題である。少し横道にそれるかもしれないが、良い機会でもあるのでここでこの問題に立ち入っておきたい。

本小論の第 VII 章まで筆者は「経験的データ理解」というあいまいな言葉を使い、様々なパター

ン等の通常の出現率を時には大きく幅を持たせながら、また時には割と厳密な数値で記してきた。「経験的データ理解」のベースになっているのは550曲余りの筆者の個人的なデータ・サンプルである。サンプルとして選曲する基準は一応ヒット曲あるいはよく知られている歌である。が、以前にも記したが、ヒット曲・よく知られている歌とそうでないものとの間に境界線を厳密に引くのはほとんど困難である。いつしかある程度知られているであろう歌やまあヒットしたんじゃないかなと思う曲が少なからずデータに混入してしまう事態となった。こうして明確な境界線の引けないデータは「経験的理解」という言葉を付して使うしかなかったのである。

無論、例えば『全音歌謡曲大全集』をすべてデータ化する方法もあったのかもしれない。あるいは10頁毎にサンプルしていく方法も一度は考えもした。が、それらの方法はとらなかった。『全音歌謡曲大全集』には選曲上の明確な基準はなく、筆者の判断では掲載曲の半分以上がほとんど知られていない歌だと思ったからである。ほとんど知られていない歌のメロディをデータ化し、出現率として算出するのはそもそも矛盾していると考えたからである。やはり多くの人の心に一度は出現したヒット曲、よく知られている歌がデータには望ましい。

こうして境界線があいまいになった筆者のデータではあるが、第Ⅶ章の上昇・同音・下降パターンの出現率についてはほとんど問題はなかったように思える。400曲を過ぎたあたりから50曲単位でデータを追加していても、微小な変化はあるものの第1－第2音符上・同・下のおよそ5：4：2という基本的なバランスはそう大きく変わることはなくなっていったのである。何故そうなのか？すでに見た＜表2＞がヒントを与えてくれる。ベスト100レベルでは各時期の各パターンのランク・イン曲数の多少はそれぞれの出現率とまったく無関係なのではなく、ある程度の相応関係があるものである。先に指摘したように＜表2＞ではすべての時期において上≧同＞下というバランス関係となっているが、このことは各パターンの出現率のバランスが時代やジャンルによって劇的には変化していないということを示している。このことによってデータ数が多くなった段階で各パターンの出現率バランスが安定することになったと考えうる。

ところが、早出・Just・遅出パターンの場合はそうはいかない。＜表4＞から解るように早・J・遅3パターンのランク・イン曲数のバランスは時期によって劇的に変化している。このことは上・同・下の場合とは逆に早・J・遅パターンの場合は時代やジャンルによって各パターンの出現率も劇的に変化していることを示している。ここで3パターンのごく大まかな出現推移の見取り図を描けば、次のように書ける。時代やジャンルを問わず最も安定して出現し、主流的な地歩を占めているのはJustパターンである。遅出パターンは唱歌・童謡等が中心の第1期にはごくごくわずかしき出現せず、第2期後半から第4期にかけて演歌系の隆盛とともに出現数は激増する。早出パターンの場合は、第1期には3拍子系のそれが多く出現し、その退潮とともに第2期には激減するが、第3期以降ポップス系の隆盛とともに4拍子系のそれが劇的に激増する。

要するに、早出・Just・遅出パターンの場合は時代・ジャンルによって出現バランスが大きく異なり、例えば50曲データを追加するたびに各パターンの出現率は大きく変化し、それ故安定した数値がなかなか得られないのである。第Ⅵ章までの出現率が大きな幅のある形で表記されていたり、「およそ…程度と考えられる」といったようにあいまいに表現されていたのはこうした理由による。が、Ⅵ章までのベスト10曲の考察においてはそれでも問題はなかった。出現率表記に大きな幅があっても、表記があいまいであっても、結論は十分すぎるほどの有意味さを持って導きだせたからである。

しかしながら、ベスト100レベルの場合、特に以下考察していく4文字パターンの場合、問題は深刻である。例えば、早・強・密・上パターンの場合、およそ30年スパンの1期、2期、3－5期のデータ曲数比を少し極端だが1：3：1にするのと1：1：3にするのではその出現率数値が2倍違ってくるであろうことは<表3>等から容易に推測できる。一方3文字パターンの強・密・上の場合は同様の極端なデータ比で考えてみてもせいぜい1.2倍程度の数値比だろうと推測される。より細分された4文字パターンの場合出現率数値はこのようにきわめて不安定であり、従って通常の出現率とランク・イン率の比較というこれまでの方法はもはや取りづらい。別の方法を考える必要がある。こうして本章ではある程度安定した数値が得られる場合を除いて通常の出現率との比較は行わず、それに代わるものとしてプラス因子、マイナス因子という新たな分析ファクターを設定したのである。この2つの因子はすでに見たようにBSベスト100曲そのものから導き出したのであり、しかもBS投票時のみならず作曲時および聴取時にも作用しているプラス・マイナス効果を示す一定の有効性を持つものと考えていい。少し横道にそれたかもしれないが、以下考察を続けよう。

<表 5 >

順位		ベスト100入曲数	ベスト10入曲数
1	早・強・密・上	19	4
2	J・強・密・同	13	1
3	弱・密・上	10	0
3	弱・密・同	10	0
5	J・強・密・上	6	3
6	J・強・疎・上	5	0
7	早・強・疎・上	4	0
8	早・強・密・同	3	0
8	J・強・密・下	3	0
10	早・強・疎・同	2	0
10	J・強・疎・同	2	0
10	J・強・疎・下	2	0
10	弱・疎・上	2	0
14	早・強・密・下	1	0
14	早・強・疎・下	1	0
16	弱・密・下	0	0
16	弱・疎・同	0	0
16	弱・疎・下	0	0

これまでの考察でプラス効果が確認されている強パターンの中で早出と Just パターンのどちらがよりプラス効果を持つのか？またどの 4 文字パターンが最もプラス効果を持っているのか？この問題を考えるために<表 1><表 3>等から作ったのが<表 5>である。より細分された18のパターンとそれぞれのベスト100ランク・イン（入曲）数とその順位およびベスト10ランク・イン数を記したものである。

先ず<表 5>を全体的に見ていこう。弱の 3 文字パターンに注目すれば、最下位集団の 3 パターンとそれと好対象をなす 3 位タイの 2 パターンが目につく。前者の弱と疎、弱と下といった 2 つのマイナス因子の組みあわせはすでに見たように多くの人の記憶に残りにくいメロディ・パターンであることを教えてくれる。一方後者は弱であっても密・上、密・同といったプラス因子と組みあわされれば十分に魅力的なメロディ・パターンになりうることを教えてくれている。が、それはベスト100レベルの話しであって、ベスト10レベルでは第Ⅲ章で見た弱＝遅出パターンの長期記憶呼び出し・3 曲選曲時におけるマイナス作用・効果が高いハードルとなる。

4 文字パターンに目を移せばその分布の違いに気付く。早パターンは 1 位から上>同>下の順でかなり下位の14位まで広がって点在し、J パターンはその内側にすべて位置し、上・同・下はかなりランダムになっている。この違いから早パターンと Just パターンの特性の一端が見えてくる。上・同・下の順が示すように早パターンは J パターンより上・下のプラス・マ

イナス因子の影響を受けやすいと言えるが、何といっても特に注目すべきは圧倒的1位(19曲)の早・密・上の組み合わせである。その場合には圧倒的なプラスの相乗効果が現れると考えられる。何故にか?

第1音符から複縦線上の強拍へと連なる早出パターンの場合ダイナミクスは弱→強と動き、すでに指摘している弱と低および強と高との仲良し関係によって音高は基本的には低→高、すなわち上昇ベクトルを持っている。特に第1音符と強拍との拍距離が近い、すなわち密の場合、強拍の吸引力の影響により上昇ベクトルは一層増し、自然にメロディを作ると圧倒的に多く上昇メロディが出現する。音楽感覚心理的に言えば、この上昇メロディはシャープでスピード感があり、明るくハイ・テンションで人の脳に快活な興奮を与え、多くの人に好まれやすい。早・強パターンにおいて密・上は本来的に自然で仲良しでベストな組み合わせである。こうして強・密・上の3つのプラス因子は早出パターンにおいて最も相乗的に作用し、少なくともベスト100レベルでは第1位の圧倒的なランク・イン数を得たと考えられる。

では、Just パターンの場合はどうか? J パターンは逆に早パターンほどは上・下のプラス・マイナス因子の影響を受けていない。下パターンに注目すると J : 早は 5 : 2 で J・下 > 早・下である。一方上パターンでは J : 早は 11 : 23 で J・上 < 早・上である。注目すべきは同パターンである。同パターンでは J : 早は 15 : 5 で圧倒的に J・同 > 早・同である。とりわけ J・密・同の組み合わせは13曲で2位となっているが、この場合どう考えればいいのか?

複縦線上の強拍から第1音符がスタートする Just パターンは、強拍の噴射力によって第2音符への上昇・同音・下降運動を早出パターンより自由に行なえる。が、無制限に自由ではない。ごくごく自然に Just パターン・メロディを作った場合、基本的には強→弱へのダイナミクス差によって確率的に第1—第2音符上昇パターンは他の2つに比べて少なくなる傾向があると考えうる。しかも下降パターンはすでに指摘したマイナス因子の作用によってある程度出現にブレーキがかかる。また疎より密の方が上昇しにくい。例えば1拍の場合は強→弱で、2拍の場合の強→小強よりダイナミクス差が大きくなるからである。こうしてごくごく自然に作った場合密パターンでは Just パターンにある意味で無難な同音パターンが多くなるのである。

このように Just パターンの特性によって多く生まれた J・強・密・同パターンは、強・密という2つのプラス因子と先に見た密・同の若干の押し上げ効果によってランク・イン曲数第2位の座を占めたと考えられる。が、<表5>のベスト10ランク・イン曲数に目を移すと、この J・強・密・同パターンは1曲(3位)と確率があまりよくない。ベスト100第1位(19曲)の早・強・密・上パターンはベスト10においても4曲ランク・インで1位である。特に興味深いのはベスト100第5位(6曲)の J・強・密・上パターンがベスト10では3曲ランク・インし、第2位となっている点である。ベスト100との比較で言えば3パターン中最もベスト10ランク・イン確率が高いことになる。この問題はどうか考えればいいのか? また J・強・密・上と J・強・密・同パターンのベスト100とベスト10での順位の逆転は何故にか?

以下のように考えることができる。J・強・密・上パターンはすでに指摘したようにごくごく自然に作った場合生まれにくく他の2パターンと比べて出現数は少ないと考えられるが、ある程度意識してこのパターンを作り、良いメロディができた場合そのメロディは長く多くの人に好まれ続けられるという特徴を持つ。この特徴は第1－第2音符上昇によって発生する音高・強弱テンションすでに指摘した高・強と低・弱の仲良し関係が逆転することにより発生する緊張に起因すると考えうる。このテンションはうまく作られないと不快な刺激・興奮を人の脳に与えてしまうマイナス要因となるが、うまく作られると人の心を取りこにして離さない魅力的なプラス要因ともなるものである。ベスト10ランク・インの「赤とんぼ」や「秋桜」の第1－第2音符が同音パターンだったらここまで多くの票が集まっただろうか？またJ・強・密・同パターン曲の7割ほどが第2－第3音符も同音、また5割ほどが第4音符まで連続同音進行である。連続同音はある種、疎と同様のマイナス効果をもたらす場合があり、密・同のせいかくの若干のプラス効果が相殺される。このパターンで唯一ベスト10入りした「荒城の月」の第2－第3音符が上昇なのは偶然ではない。細かく見れば第1－第3音符の上昇ベクトルもなお若干のプラス効果と考えられる。こうしてJ・強・密・上パターンとJ・強・密・同パターンとのベスト10ランク・インへの逆転現象は起きたと考えうる。やはり強・密・上という3つのプラス因子とその相乗効果は強力なのである。

では3つのプラス因子を持つ早・強・密・上パターンとJ・強・密・上パターンのどちらが多くの人々の記憶に残りやすいのか？出現率等の問題はあにしろベスト100レベルではやはり前者に軍配をあげないわけにはいかないだろう。ベスト100ランク・イン曲数は前者19、後者6であり、何といってもこの差は大きい。が、ベスト100レベルには「ある程度多くの」という限定がつく。ベスト10を除いた90曲とベスト10曲の平均得票数は、正確な数比はわからないが数倍の差はあるはずである。「多くの」という言葉にふさわしいのはやはりベスト10レベルであろう。が、そのベスト10レベルでは前者4曲、後者3曲であり、少なくとも有意味な差があるとは言えない。確かにベスト3の3曲はすべて前者早・強・密・上パターン曲ではあるが、前者4曲はすべて第3－第5期のそう古くない曲でもある。これに対して後者J・強・密・上パターンの3曲中2曲は第1－第2期の比較的古い曲である。第VI章でごく一瞬触れたが、この問題、すなわち長期記憶曲の中の時間ファクターという問題をどう考えればいいのか？

本小論は、どのようなパターン・特徴を持つ歌メロディが長く多くの人々の記憶に残るかというテーマでここまで考察を進めてきた。考察の重心は「多くの」に偏ってきたようである。「長く」についてはBS投票の過去5年以前の日本の歌とひと括りしただけでその歌メロディが記憶されてきた時間の長さについてほとんど言及してこなかった。例えば第1位の「川の流れのように」(1989年発売)と第7位の「荒城の月」(1901年作曲)の間には90年近い記憶時間の差がある。両者をたんに長期記憶曲と括って同列に論じていいはずはない。長期記憶曲における時間ファクター、この問題を一度は考察しておく必要がある。難しい問題であるが幸い

<表1>から<表4>が手掛りを与えてくれているので次章でトライしてみたい。が、紙数の関係上号を改めて論じることとする。

(主な参考文献および資料)

藤井正博「日本の歌メロ進化論(序)ーAメロディの起動と[A]第1小節線ー」『神戸山手女子短期大学紀要』41号、1998年

『全音歌謡曲大全集〔1〕ー〔8〕』全音楽譜出版社

『日本流行歌史ー上・中・下ー』社会思想社、1995年

柿本堯夫編『音楽心理学の研究』株式会社ナカニシヤ出版、1996年

池谷裕二『記憶力を強くするー最新脳科学が語る記憶の仕組みと鍛え方ー』講談社、2001年

『BS20世紀日本のうたーグランド・フィナーレーー』(録画ビデオ) 1998年

ハンス・ペーター・シュミッツ『演奏の原理』シンフォニア、1977年

ホアン G. ローダラー『音楽の科学』音楽之友社、1993年

<次号以降の章構成(予定)>

IX. 考察(7)ー長期記憶曲における時間ファクターとBS ベスト10曲の将来的行方ー

結び